

## インフレと通貨選択

FED も ECB も次の政策会議で金利は据え置き確率が高い。インフレ率の伸びが鈍化してきたことが要因だ。しかし依然として目標の2%は大きく上回っている。9月のCPIは米国で3.7%上昇、ユーロ圏で4.3%の上昇だ。日本も2%を上回ってきたが、それが定着するかで喧々諤々の議論が行われている。政府も中央銀行も市場もその方向の見極めに躍起となっている。

だがインフレ率が9月に138%を記録した国ではどうなのか。もちろん金利は引き上げてきた。だがインフレは止まらない。通貨は安くなる一方だ。国民はもはや自国通貨を信用しない。金融機関に対してもだ。過去に何度も通貨危機を経験し、預金封鎖もされた。自国通貨建て預金の価値は半減した。ドルや外国の金融機関を選好する理由は十分だ。

肉やワインはうまく、自然も豊かだ。音楽などの文化水準は高く、サッカーは前回のワールドカップで優勝した。素晴らしい国だ。だが政治と経済に問題がある。

為替レートは通貨安が続き現在は1ドル350ペソ水準だ。私がアルゼンチンに行った5年前は28ペソぐらいだった。大幅なペソ安の進行だ。だが実態はもっと激しい。最近のブラックマーケットでは1ドル1000ペソ水準だ。

そこで大統領選挙だ。候補者の一人(ミレイ)は通貨ペソを廃止して、ドルを自国通貨にする政策を掲げた。いわゆるドル化だ。他にも政府支出をGDPの15%削減することなど、小さな政府を目標とする。現政権は放漫な財政政策で財政赤字を膨らませ、IMFからの借り入れに頼った。外貨準備は底をつき実質赤字だ。中国とのスワップ協定などでの借り入れで何とかしのいでいる。

ドル化は通貨主権の放棄なので独立国として取りにくい選択だ。だがアルゼンチンはこれまでの歴史の中でインフレの高騰、通貨安、資本流出を繰り返し、通貨危機を何度も経験してきた。その延長線上にドル化のアイデアが出てくるのはそれほど急進的とも思えない。

中南米では歴史的にインフレに悩む国は珍しくなく、ドル化の議論はたびたび出てくる。実行に移す国は少ないが、パナマはドル化した。

ミレイは8月の予備選挙では1位になったが、先日の本選挙では2位になって、11月19日の決選投票に進むことになった。1位になったのは現政権の経済大臣(マッサ)だ。急進自由主義者と言われるミレイと従来の政策を担ってきたマッサとの闘いであると同時に、ペソの生存をかけた闘いでもある。